

熊本六街道

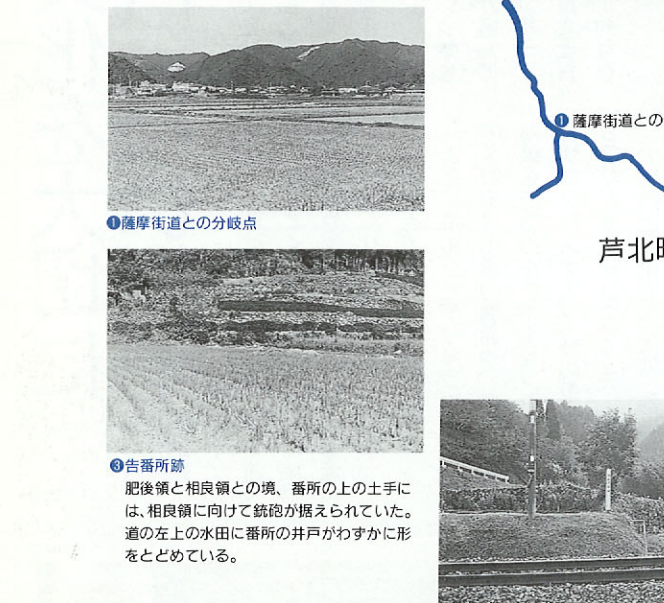
人吉街道と球磨川水運

相良藩の生命線—人吉街道

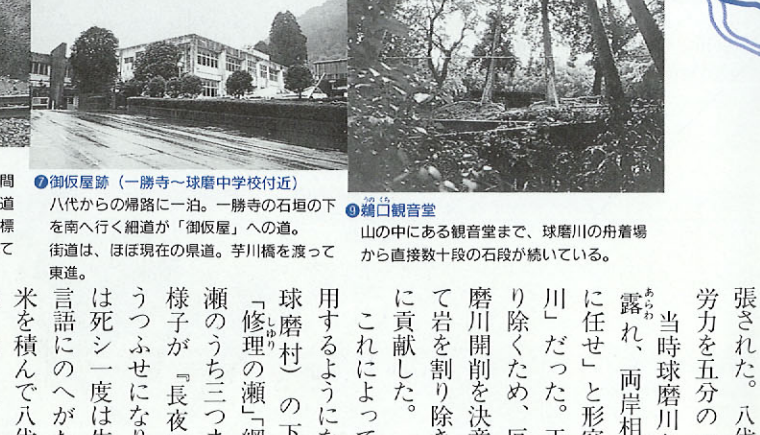
江戸時代、九州山地に閉ざされた相良藩（現在の人吉・球磨地方）には、三つの主要路線があった。一つは薩摩街道と佐敷で分かれ、山越えをして大坂間（球磨郡球磨村）—渡（同）—人吉と球磨川を渡る人吉往還。もう一つは人吉から南下して大畑町（人吉市）—堀切峠（加久藤越）—日向国（宮崎県えびの市）へと至る道。そして人吉往還をさらに東進して湯前（球磨郡湯前町）—横谷峠—日向国（宮崎県西米良村）を結ぶ道。人吉街道とはこの三路線を総称する便宜的呼称である。

お嶽まいるの道—横谷越
横谷越は加久藤越との分岐点（人吉市浪床町）から湯前町・市房山方面を目指す。この道は日向国との交易ばかりでなく、藩主の領地巡見や毎年一回市房神社に参拝する「お嶽まいる」に活用されていた。
「お嶽まいる」は庶民の行事である。旧暦三月十五日から十六日、恋の成就を祈る若い男女や新婚夫婦が大勢、この縁結びの神様を訪れた。山の麓湯山の辺りでは街道が人々によって埋めつくされ、湯山集落では手分けして「お嶽まいる」の人々を宿泊させていたといわれる。
「お嶽まいる」の他にも、人々の生活風俗と「道」が深く結びついているものがある。

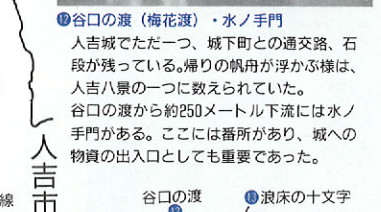
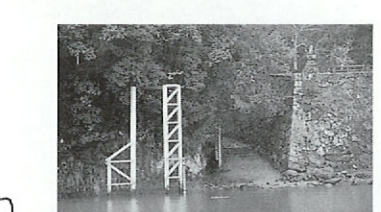
「相良三十三観音めぐり」がそれで、これらの札所（観音堂）は、ほとんどが佐敷—人吉—横谷越への往還沿い、または球磨川沿いに残っており、人々が当時の生活や風習の中で往還と深く結びついていたことが伺える。



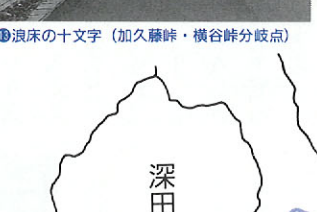
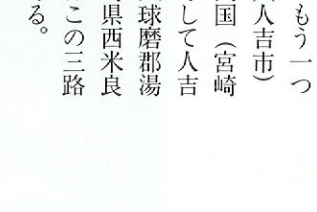
これら三つの観音めぐりが、これら三つの観音堂は、ほとんどが佐敷—人吉—横谷越への往還沿い、または球磨川沿いに残っており、人々が当時の生活や風習の中で往還と深く結びついていたことが伺える。



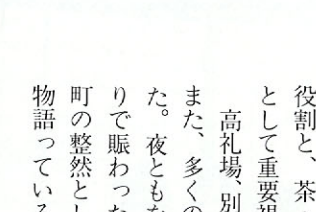
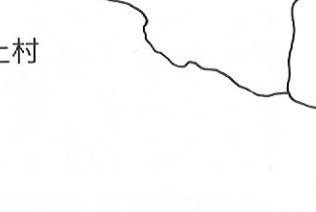
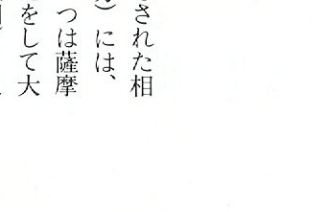
①亀割の瀧
②立石の石置
③立石の石置
④鷹割の瀧
⑤立石の石置
⑥鷹割の瀧
⑦鷹割の瀧
⑧鷹割の瀧
⑨鷹割の瀧
⑩鷹割の瀧



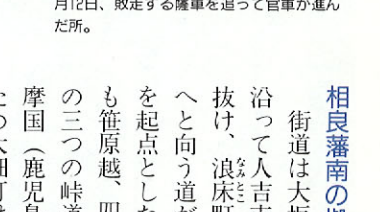
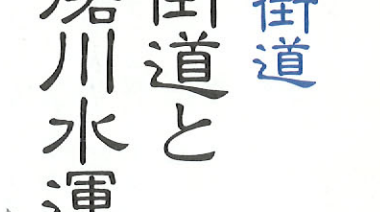
⑪青井阿蘇神社
⑫浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑬浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑭浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑮浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑯浪床の十文字 (浪床 Tenji)



⑰浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑱浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑲浪床の十文字 (浪床 Tenji)
⑳浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉑浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉒浪床の十文字 (浪床 Tenji)



㉓浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉔浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉕浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉖浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉗浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉘浪床の十文字 (浪床 Tenji)



㉙浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉚浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉛浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉜浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉝浪床の十文字 (浪床 Tenji)
㉞浪床の十文字 (浪床 Tenji)

相良藩南の拠点—大畑町

街道は大坂間から国道二一九号線に沿って人吉市内へと入る。人吉城下を抜け、浪床町から右手に折れて大畑町へと向う道が加久藤越である。大畑町を起点とした路線には加久藤越の他にも笹原越、四谷越、鷹の巣越（飯野越）の三つの峠道があり、人吉と日向・薩摩国（鹿児島県）を結んでいた。このため大畑町は島津氏を意識した軍事的役割と、茶・煙草等の物資交易の拠点として重要視されていた。
高礼場、別当宅などが四十軒も並び、また、多くの旅商人の宿場町でもあった。夜ともなると三味線地方や歌、踊りで賑わったといわれる。今でも大畑町の整然とした町並が、当時の繁栄を物語っている。

「あばれ川」を開く—球磨川水運
悠々として、時に激しく流れる球磨川は、相良藩のもう一つの交通路である。球磨川の水運は、寛文二年（一六六二）人吉の一人商人林正盛によって拡張された。八代への物資運搬の手間と労力を五分の一にしたという。
当時球磨川と言えは、「河底は岩盤露れ、兩岸相狭窄して奔流の泡立つに任せ」と形容されるほどの「あばれ川」だった。正盛は山越えの難儀を取り除くため、厄払いの意味も込めて球磨川開削を決意。約三年の月日をかけて岩を割り除き、球磨川の水運の発展に貢献した。
これによって参勤交代も川下りを利用するようになった。一勝地（球磨郡球磨村）の downstream には「二侯の瀨」「修理の瀨」「網場の瀨」の球磨川五大瀨のうち三つまでが続き、そこを下る様子が「長夜の夢」に、「目をふさきうつつせになりて外を見ず（略）一度は死シ一度は生、恐しき夢を見る思ひ、言語にのへがたし」と語られている。
米を積んで八代に下る舟が破損した記録も残されているほどで、参勤交代の場合、この急流の手前で藩主を上陸させ「青戸」までは人吉街道を通行した。これを「瀬越し」と呼ぶ。まだまだ危険であった水運は以前からの陸路とうまく組み合わせて活用され、人々に利便を与えていたのだろう。河川改修やダムの建設で流れは昔ほど激しくないという。

三つの速瀬を下り切ると、流れは北流から西流に向きを変えるが、この大湾曲部を曲がるとすぐに「槍倒し」「舅落し」「清正公岩」の絶壁が続く。今は球磨川を列をなして下って行く観光川下りの船が、昔の旅の雰囲気をおもわせる。